

# 妙心尼御前御返事

建治元年八月二五日 五四歳

種々<sup>種々</sup>の御志<sup>た</sup>送り給<sup>あわ</sup>び候<sup>あわ</sup>ひ了<sup>あわ</sup>んぬ。

を<sup>幼</sup>さなき人の御<sup>守</sup>ために御まぼりさづけまいらせ候。この御まぼりは、法華經のうちの<sup>肝</sup>かんじん、一切經のげんもくにて候。たとへば、天には日月、地には大王、人には心、<sup>よ</sup>たからの中には如意宝珠<sup>ぼじゆ</sup>のたま、いえにははしらのやうなる事にて候。

このまんだら<sup>曼荼羅</sup>を身にたもちぬれば、王を武士のまぼるがごとく、子を<sup>親</sup>を<sup>愛</sup>やのあいするがごとく、い<sup>魚</sup>を<sup>持</sup>の水をたのむがごとく、草木の<sup>雨</sup>あめを<sup>樂</sup>ねがうがごとく、<sup>鳥</sup>とりの木をたのむがごとく、一切の仏神等のあつまりまぼり、昼夜にかけのごとくまぼらせ給ふ法にて候。よくよく御信用あるべし。あなかしこ、あなかしこ。恐々謹言。

八月二十五日

日 蓮 花 押

妙心尼御前御返事